

作業科学シンクタンクの報告

県立広島大学保健福祉学部

吉川 ひろみ

Hiromi Yoshikawa

第1回作業科学シンクタンクの前

2004年11月に、三原市で開催された第8回作業科学(OS)セミナーの後、Ruth Zemkeさんから、OSの国際組織ができるので、アメリカとしても参加するが、日本はOSの組織がないから参加できないという話を聞いた。アメリカでは、the Society for the Study of Occupation: USAという組織があり、年に1回学会が開催されていることは知っていた。当時の私は、毎年開催されている作業科学セミナーへの参加者と、200名以上の会員を擁する日本作業行動研究会(OB研究会)が合流することを望んでいた。これまでの経験から、研究会の事務局運営業務は煩雑で、本来の会員としての活動のエネルギーを分散させてしまうし、「作業」に関心がありOSセミナーに参加している作業療法士は私も含め、すでにOB研究会の会員だったので、OSの研究会を作ったら、さらに会費を支払わなければならない。それ以上に私が日本作業科学研究会(OS研究会)設立に反対だった理由は、南カリフォルニア大(USC)とKielhofnerのよさそうにはみえない関係を日本に持ち込みたくなかった。日本の作業療法界は、疾患や障害の種別や、発症からの期間で、作業療法の内容を深めていこうとしている。この現状の中で、その人の作業に焦点を当てて評価、介入をしようという作業療法士は極めて少ない。その少ない作業療法士をOBだのOSだのとに分けたくなかった。作業に焦点を当てて作業療法を行う作業療法士の力を結集する道を探っていたのである。

2005年12月、浜松市で開催された第9回OSセミナーの数ヵ月後、Alison Wicksさんから2006年7月にオーストラリアで開催されるOSシンクタンクに誘われた。宮前珠子さんからの紹介だということだった。シドニーの世界作業療法連盟学会には参加するつもりだったので、その1週間前から開催されるOSシンクタンクにも出席することにした。

第1回作業科学シンクタンク

第1回OSシンクタンクの参加者を表1に、概要を表2に示した。細身で大きな目をきらきらさせているAlisonさんは実に魅力的だった。自宅のある小さな町の大学にオーストラリアン(オーストラリアとニュージーランドの意)作業科学センターを設置し、助成金を得て世界各地から20名の参加者の滞在費を捻出して、今回のシンクタンクを実現させたのである。事前に提出された意見書などを参考に選んだ文献を文末に示した。Elizabeth Townsendさんはいつものように穏やかに優しく、Ruth Zemkeさんもみんなを包み込むおらかな雰囲気を醸し出していた。名前しか知らなかったHelen Polatajkoさんは力強く、なるほどなあと思った。途上国で貧困や非行の状況にある青少年に意味のある作業を見出す仕事をしているKerry Thomasさんは、オーストラリアに住み英国などの財団から助成金を得てアフリカなどで仕事をしていた。「Occupational Therapy without border」の編著者であるFrank Kronenbergさんは、ストリートチルドレンのための作業療法や障害者も参加できる南アフリカ旅行を企画するなど新規分野開拓者だ。Journal of Occupational Scienceの編集長Clare Hockingさんは、2002年にWFOTが発行した作業療法士教育最低基準の責任者でもある。Gail Whitefordさんは、最初はアートセラピスト出身でAnn Wilcockから作業療法を学び、Alisonさんの博士論文の指導教授だったそうだが、Alisonさんより若かった。刑務所での作業療法などにも取り組んでいる。Jin Ling LoさんはUSCで博士号を取得し、少し前まで台湾作業療法協会の会長だった。台湾で作業科学の研修会を開催したり、メールでのネットワークを作っている。

シンクタンク参加者の関心のあるテーマから6つのカテゴリーが浮上した。①作業に関する知識を実践に生かす、②作業科学を世の中に広める、③学問として成長する、④社会や環境に対する責任を果たす、⑤新しいパートナーを見つける、⑥社会的、政治的な活動

をしていく。私はシンクタンクに参加するまで③が中心なのかと思っていた。個人的には①や②に関心がある。しかし④⑤⑥にはびっくりだった。シンクタンク開催初日に朗読されたAnn Wilcockさんからの手紙(表3)や、Kerryさんとの会話の中で、作業的公正(occupational justice)が実現する社会の創造のために自分に何ができるかを考えようと思った。Kerryさんになぜ今のような仕事をしようと思ったかと聞くと、Wilcockさんに会ったからかなと言った。シンクタンクは混沌の中で期限を迎え、次は来春にUSCでというFlorence Clarkさんの一言で継続することになった。

第1回作業科学シンクタンクに参加して、参加者の夢が私に転移してしまった。高齢者の筋トレをしたり、障害者の運動パターンを矯正したり、集団に馴染めない人に〇〇障害という名前をつけることだけに真剣になることを止めさせなければならない。弱者を救済するという発想から、すべての人が生まれてきてよかったと思えるような作業に出会える社会を創造するという発想へと、視点を変える機会をあちこちに作り出さなければならない。4か月後に日本作業科学研究会が誕生した<<http://www.amrf.or.jp/jssso/links.html>>。

第2回作業科学シンクタンク

第19回USC作業科学シンポジウムに続く日程(2007年4月1~3日)で、ロサンゼルスのカタリーナ島で第2回作業科学シンクタンクが開催された。14カ国から27名が参加し、日本からは第1回参加の2名に加えて岡南病院とカロリンスカ研究所(スウェーデン)に所属する本研究会の理事でもある浅羽エリックさんが参加した。ヨーロッパのthe European Network of Occupational Therapy in Higher Education, the Health Through Occupation Research Group, アイルランド, ノルウェーからも参加し、南米ではブラジルとチリからも参加した。すでに1999年には、米、英、豪、加が参加した作業科学者国際協会(International Society of Occupational Scientists)が設立されていたが、その後日本を始めとして、作業科学研究会などがされたので、新しい作業科学の国際組織「International Society for Occupational Science: ISOS」の設立準備が進められることになった。研究推進、教育発展、社会貢献、権利擁護など、今後の活発な活動が期待される。懸案事項であった作業科学の新しい国際組織の設立のための役員として、会長にアリソン・ウィックスさん、役員に浅羽エリックさん、エルナ・ブランチさん、ハンス・ヨンセンさん、デビー・ラドマンさんが選出され、

正規の新役員は9月末に決定する予定である。

作業科学シンクタンクに参加して

何か新しいことを知ると、その前までとは違ったものが見え、違った考えが浮かび、違った感情が湧いてくる。世の中にはいろいろな人がいろいろなことを考えている。作業という視点で物事を見つめなおすことで、新たな視点と新たな方策が浮かんでくる。みんな考えるだけではなく、行動していた。行動しながら気づいて、考えを深めていた。作業をするということが、その人をその人らしく、社会をよりよくしていくことに関係していると思うようになった。

文献

- 1) Christiansen C & Townsend E: An Introduction to Occupation: The Art and Science of Living. Prentice-Hall Publishing Co, Thorofare, 2004
- 2) Clark F: One person's thoughts on the future of occupational science. Journal of Occupational Science 13, 169-179, 2006
- 3) Hocking C: Occupational Science: A stock take of accumulated insights. Journal of Occupational Science 7, 58-67, 2000
- 4) Kronenberg F, Algado SS, Pollard N: Occupational Therapy without Borders: Learning from the spirit of Survivors. Elsevier-Churchill Livingstone, Oxford, 2005
- 5) Kronenberg F & Pollard N: Political dimensions of occupation and the roles of occupational therapy. American Journal of Occupational Therapy 60, 617-625
- 6) Molineux M & Whiteford G: Occupational science: genesis, evolution and future contribution, In E. Duncan (Ed.) Foundations for Practice in Occupational Therapy, Elsevier, London, 2006, pp. 297-313
- 7) Molke DK, Rudman DL, Polatajko HJ: The promise of occupational science: A developmental assessment of an emerging academic discipline. Canadian Journal of Occupational Therapy 71, 269-281, 2004
- 8) Pierce D: Occupation by Design: Building Therapeutic power. FA Davis, Philadelphia, 2003
- 9) Whiteford G & Wright-St. Claire V: Occupation & Practice in context. Elsevier- Churchill Livingstone, Sydney, 2005

- 10) Wilcock AA: Occupation for Health. Volume1: A Journey from Self Health to Prescription. London, British Association and College of Occupational Therapy, 2001
- 11) Wilcock AA: An Occupational Perspective of Health, Slack, Thorofare, 1998
- 12) Wilcock AA: An Occupational Perspective of Health 2nd edition, Slack, Thorofare, 2006
- 13) Zemke R & Clark F: Occupational Science: The Evolving Discipline, FA Davis, Philadelphia, 1996

表1 シンクタンク参加者

第1回参加者	所 属
Mandy Stanley, Kerry Thomas, Gail Whiteford, Alison Wicks, Ian Ring	オーストラリア
Clare Hocking, Valerie Wright-St Clair	ニュージーランド
Debbie Laliberte Rudman, Helene J. Polatajko, Elizabeth Townsend	カナダ
Tamako Miyamae, Hiromi Yoshikawa	日本
Jin Ling Lo	台湾
Hans Jonsson	スウェーデン
Matthew Molineux	イギリス
Florence Clark, Virginia Dickie, Doris Pierce, Ruth Zemke	アメリカ
Frank Kronenberg	オランダ, 南アフリカ
第2回参加者	所 属
Mandy Stanley, Alison Wicks, Ian Ring	オーストラリア
Clare Hocking, Valerie Wright-St Clair	ニュージーランド
Debbie Laliberte Rudman, Lynn Shaw	カナダ
Tamako Miyamae, Hiromi Yoshikawa	日本
Eric Asaba	日本, スウェーデン
Jin Ling Lo	台湾
Hans Jonsson	スウェーデン
Sissel Alsaker	ノルウェー
Matthew Molineux, Susan Corr	イギリス
Eithne Hunt	アイルランド
Florence Clark, Virginia Dickie, Doris Pierce, Diane Parham, Mary Lawlor Jeanne Jackson	アメリカ
Erna Blanche	アメリカ, チリ
Claudia Munoz	チリ
Sandra Galheigo	ブラジル
Lana Van Niekerk	南アフリカ
Hannake van Bruggen	EU
Frank Kronenberg	オランダ, 南アフリカ

表2 第1回作業科学（OS）シンクタンクの概要

日	活動	テーマと内容
19日	到着	
20日	開会式，セッション	<p>オリエンテーション：OS研究には，地域研究も国際研究も重要であり，どのように協働していくか，組織をどうするか，といったテーマが提示された。</p> <p>OS研究のテーマ：多様な意見が飛び交い，疑問が出された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ OSとOTとはどのような関係か？ ・ シンクタンクが研究テーマを決めるのか？ ・ 国際的社会的問題にOSが関わる利害は？ ・ OS研究の基盤は何か？ ・ OS研究は知識を確立するのか広げるのか？ ・ OSが扱うのは国際的問題か，地域の問題か？ ・ OS研究の存在論，認識論的立場は？ ・ 資金源をどう求めるか？ <p>10年後の理想：「10年後に私たちは，どのようでありたいか」という問いへの答えを整理すると次の6カテゴリーが浮上した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 作業に関する知識を実践に生かす 2) 作業科学を世の中に広める 3) 学問として成長する 4) 社会や環境に対する責任を果たす 5) 新しいパートナーを見つける 6) 社会的，政治的な活動をしていく
21日	セッション，夕食会	<p>今興味あるテーマの位置づけ：具体的に何ができそうか考えた。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 高齢者の孤独解消プログラム提案 2) メディアの活用や作業する人の彫刻の公園 3) 作業バランスなどに関する実証研究 4) 難民や貧困などの問題へのアプローチ 5) 研究助成団体，観光業界 6) 政策への関与，社会正義 <p>組織：1999年に設立された世界作業科学者協会の経緯を踏まえて，国際組織の新規設立とビジョン，今後の計画について話した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ビジョン：結集力と力動性と多様性をもつ科学の発展を目指す。この科学は，実践に活かされ，社会の主流となり，社会にも生態系にも責任を果たし，新たなパートナーを開拓し，社会的・政治的影響力をもつ。 <p>組織については，第2回シンクタンクで話し合うことになった。</p> <p>振り返りと決意：最後に参加者がシンクタンクを通して感じたことなどを語った。</p>
22日	早朝散歩	

表3 Ann Wilckさんからの手紙の抜粋

(前略) 作業科学者として私は、この世界に生まれたことに興奮を覚えています。この科学が世界中のたくさんの方々のやっかいな問題に答えを出す力を持っていると、私は確信しています。もし、人々がしている仕事の中で作業という部分に関わる分野が発展し採用されるならば、多くの問題が解決するでしょう。この想いが私をJournal of Occupational Scienceという雑誌を出す方向に向かわせたのです。この夢がまだ知られていないということは悲しいことです。作業科学が莫大な利益を与えるかもしれないという潜在性が埋もれたままになるからです。私は作業科学が作業療法にだけ普及するということは考えたこともありません。そうなっても不思議はありませんが、作業科学というこの概念が私を奮い立たせるのは、その包容力のある性質です。人々が生きるために、生き抜くために必要なこと、しなければならないこと、健康や幸福の経験、といったすべてを持ち込めるところです。人々が何を感じ、それが発達や成長にどのような影響を与えるか、社会や文化とどのように関連するか、そしてこのことが多くの分野によってばらばらに研究されたならば、いかに誤った理解をもたらしてしまうことか。この科学はとても包容力があるので、要素還元主義も取り込んでしまうと思います。この科学はとても重要なので、社会政治的方針に対しても、高いレベルで挑戦していくと思います。私はこの科学が、すべてを達成する力を持ち続けていると信じています。(後略)

表4 世界各地の作業科学に関する団体

the Australasian Society of Occupational Scientists
 the Canadian Society of Occupational Scientists
 the European Network of Occupational Therapy in Higher Education
 the Health Through Occupation Research Group
 日本作業科学研究会 (the Japanese Society for the Study of Occupation)
 the Journal of Occupational Science
 Occupation & Ireland
 the Society for the Study of Occupation: USA
 the Spirit of Survivors: Occupational Therapy without Borders
 the World Federation of Occupational Therapists' International Advisory Group: Occupational Science